

保険数学客員教員、同窓会監査役 退任にあたって

中山 素生
平成元年学部卒業



昭和60年入学、平成元年学部卒業の中山です。懇親会の司会の木坂さんとは同級生です。日本生命で勤務していますが平成20年度から平成30年度まで11年間にわたり数学教室アクチュアリーサイエンス部門の客員で教えておりました。保険数学の講義、演習をする大学はいくつかありますが、ゼミ、修士論文指導まで行っているのは京都大学だけです。日本アクチュアリー会から5名の教員が派遣されて学生の指導にあたっています。最近では、アクチュアリー会の会合に行けば、京大で保険数学を勉強していた元学生さんからも、「正会員になりました」とご挨拶を受ける立場にもなりました。

私自身の仕事について少しご説明いたしますと入社時は主計部という会社の決算を行う部署に配属となりました。保険契約の支払いに備えるのに必要となる「責任準備金」を計算します。26兆円ありましたが、当時は世界一の規模の保険会社でしたので大げさに言えば世界一の金額を扱う経験をしました。決算の前には収支の予測をし、配当水準の決定、自己資本の積み増しといった事項については役員会決議や役所届出も必要となるといった業務に携わっていました。その後、企業年金のコンサルティングの部署に異動し現在もその仕事に従事しております。

大学に教えに来るようになった年はリーマンショックという大きな金融危機があった年です。前年にアクチュアリー会の分科会でカナダの企業年金の財政運営基準について調べていましたが、大学にいる時間を使ってまとめアクチュアリー会の年次大会で発表しました。カナダの企業年金の財政運営基準では財政悪化に備えてのリスク対応準備金の検討を既に数年前からしているという内容です。運用環境が悪いと不足金が発生し追加掛金が必要となりますが、そういった時期は景気も悪いことが多く、その中で企業は掛金を増やさなくてはならない。そこで財政的に余裕のある時期に一定のリスク対応準備をしておこうというスキームです。私の発表の影響だけではないですが、その頃から日本でも本格的に検討が進み3年前に法制化されたところです。

私の学生時代がどんな時代だったのかを振り返ってみます。

1 回生（1985 年 4 月-1986 年 3 月）

百万遍について

私が生まれたのは奈良県にある浄土宗のお寺でしたので総本山は知恩院と永観堂、大本山が知恩寺です。知恩寺が「百万遍」の由来であることは知っていました。秋の古本市も賑わって有名ですが、お堂の中を見せていただくと薄暗い中に巨大な数珠が壁にかけてあり、数えるための巨大なソロバンもあるのが「数」との関係を意識させるのは神秘的です。また、当時は中華料理屋「百万石」の2階に「百万遍コピーセンター」がありましたが、グリコ森永事件の犯人がマスコミ各社に送る「ちょうせんじょう」をコピーしたことで有名でした。なお、ミリオンという喫茶店もあり、学生時代には意識していませんでしたが最近になって百万遍からミリオンという名前なのか?とようやく気が付いた次第です。

百万は 10^6 ですが、京都大学の京も数字では 10^{16} です。そのあたりも同窓会の愛称を考えるヒントになるのではと思います。

クラスは 85-S6 で、フランス語を選んだ学生で集まったクラスです。そのなかで数学系に進んだのは、吉富賢太郎、加藤希理子、山岸義和、廣瀬賢一、上谷敏章、藤原滋木、中村滋といった面々、現在数学教室専攻主任を務める泉正己君は学部では物理系でしたが同じクラスでした。去年は学部卒業 30 年ということでクラスの同窓会も行いました。

フランス語は増加単位も含めて 3 人の先生に勉強するのですが、私たちのクラスは、山本淳一先生、バンジャ先生、石井洋二郎先生。石井先生にはクラス名簿に序言を書いていただきました。新入生の皆さんの歩む道はそれぞれだが、学問の王様になる道かさては学問の乞食になる道か、そのスタートラインに半ば強制的に立たされている。自由放任の大学にいることのリスクを意識しておくこと。頑張るように。とのことだったと記憶しています。（平成 26 年度の東大教養学部卒業式での送る言葉「肥った豚よりも痩せたソクラテスになれ」に関して「第一次情報に立ち返って確認すること」でも話題になりました。）

大学数学の最初の講義は、塚本千秋先生の線形代数でしたが、一回生授業にありがちな中核派の「三里塚闘争」「防衛費 GNP1% 枠突破」といった政治問題を持ち込む授業妨害に悩まされながらの講義だったことが思い出されます。微分積分は丹代先生でした。

1 回生前期で大変だったのは体育でした。中学時代にやっていたサッカーを選択したところ当然場所は農学部グラウンド。次の授業の物理は、教養部図書館の南側の F 号館。着替えをして、北部構内の北端の農学部グラウンドから今出川通りを渡り本部構内から東一条通りを渡って教養部の南まで徒歩でしたが 15 分の休憩時間では絶対に間に合いませんでした。人文地理学や教育学の講義は E 号館の 300 人は入れる大教室でマイクを使いながらの講義でしたが、鳥取の田舎から出てきた私には大学の講義の大人数教育に圧倒された記憶があります。

クラスの何人かで集まって麻雀やビリヤードの勉強会が楽友会館で開催されました。麻雀の役の一盃口は鳴いたら役が付かないことは泉正己君に教えてもらいました。

夏休みに鳥取の成人式がその当時はお盆開催だったのと高校・中学の同窓会もあるので浮かれて帰省したものの8月12日のJAL123便の墜落事故で520人が亡くなる大惨事にはショックを受けました。9月になって講義が1, 2回ほどあったのちに前期試験。今は7月末に前期試験をしてから8, 9月が夏休みとなっています。これも大学に教えに来て驚いた事でしたが、夏休み前に試験までやる方がいいように思います。

11月祭では、1回生は希望すれば抽選なしで模擬店を出すことができるというので何かやろうということになりましたが結局何をしたのか思い出せません。同じクラスの竹川君が中心となって彼が描く漫画のイラストやら「A号館の水」などを道端で販売していた記憶があります。また忘年会や鍋パーティーを誰かの下宿に集まって開催しました。山手線ゲームなどをしましたが罰ゲームで何か一発芸をするといったことで結構一回生の頃はクラスで集まって何かと仲よくなった記憶があります。

1月20日 英語の講義中、教室のすぐ外の廊下で中核派リーダーが革マル派に襲撃され死亡しました。10mも離れていないところで殺人事件が発生したことにショックを受けました。その事件を契機に中核派によるバリケードストライキが何回か繰り返されました。文学部の同級生はフランス語の試験がバリストで延期となり、延期の日もまたバリストで、結局試験が実施されず、平常点で評価されたため単位を落としたという話を聞きました。

試験期間後に吉田神社の節分祭が開催され、参道に出店が延々と並ぶ光景を初めて見たときは壮観で圧倒された記憶があります。

そのころから家庭教師のアルバイトも増やしたことで、2回生からは思い切って生活の拠点を移し、吹田の祖母の家から浄土寺に下宿することにしました。その頃に流行っていた歌に渡辺美里さんの My Revolution という曲があり、「自分だけの生き方、誰にも決められない」というフレーズに励まされていたように記憶しています。

多いときは週7件のアルバイトでしたので真面目に勉強していた学生ではありませんでした。家庭教師のアルバイトは、大学の学生部の紹介案件でしたが、希望する学生が集まってその場で2列に並んで向かい合い、端からジャンケンをします。私が勝ち抜いた時は50人ぐらいでの勝負だったと記憶しています。

2回生

毎日吉田山を自転車で越えて大学に通いましたが、一コマ目に語学の講義を入れて学校をさぼらないように努めていました。昼からは下宿に戻ってアルバイトの準備をし、錦林車庫からバスに乗り三条京阪（当時京阪は三条までで出町柳まで延伸したのは卒業の後）や四条河原町から電車で出かけていました。土曜日は三条京阪から八幡市で家庭教師をした後、枚方からバスに乗って茨木の塾で教えて、阪急で河原町まで戻り、17系統の赤バス（最終）や緑バス（最終の一つ前）で浄土寺に帰ってきて、24時に閉まる銭湯に10分前に滑りこむという感じでした。

京阪電車ではジーパン姿の森毅先生をよくお見掛けしました。八幡市に住んでおら

れたと記憶しています。受験生の時に「数学受験術指南」を読んでいたことや、TVのコメンテーターで良く出演されていたので名前や風貌はよく記憶していました。講義も数学5を取りました。数学の講義内容よりは脱線したときのご自身の体験談をよく覚えています。「図書館や事務の方に顔を覚えてもらうように、帰省した時にはちょっとしたお土産を持って行って仲よくなっておくこと。そういったことが社会に出たときには重要になる。自身も数学中央図書室には三高時代から仲良くしてくださっているお姉さまがいるが何かと助けてもらったことがある。見よこの先駆者ぶりを」と。

期末試験はレポート問題と自由問題があってどちらを書いてもよかったと記憶しています。自由問題というのは数学に限らず自分の発見したことを学問的に調べてレポートにする。例として挙げられたのは、女子学生が提出した「銭湯」のレポートが秀逸だったという話。「京都は昔から家には風呂が無くて外風呂（銭湯）の文化だったのでタオルで前を隠すことはなくオープンな雰囲気であるが、自分の地元に戻って銭湯に行ってみたらみんな前を隠す。内風呂が定着している土地での銭湯はやはり他人行儀などところがある。その他にも、いくつか論証を挙げて文化人類学的にも素晴らしい内容のレポートだった。」と、そこまで言われると、そんな興味をそそられる観察対象もリサーチする時間もないしと数学の問題を解いて提出しました。

下宿の大家さんが高齢を理由に下宿を今年で辞めたいとのことで、12月に引っ越しをしなければならなくなりました。生協で下宿の相談に行きましたところ、大学が一番近い下宿が日仏会館の裏手にあり一部屋空きがあるとのことでそこに移りました。

その年の暮れ12月29日に鳥取へ帰省を予定していましたが、前日の12月28日に山陰線の余部鉄橋からお座敷列車が強風に煽られ落下し、鉄橋の下にあった水産加工工場と民家を直撃するという痛ましい事故がありました。帰省するのが一日早かったらと思うとぞっとしました。

3 回生

3回生からは学部の講義も本格的に勉強しなければならないものの相変わらず生活費を稼ぐべくアルバイトの時間は削れません。割のいいバイトを探していたところ、同じ下宿で司法試験の勉強をされていた法学部の小林賢次さんに、近畿自転車競技会のアルバイトを一緒にやらないかと誘われました。それは、競輪選手養成講座の先生でした。競輪選手になるには高卒資格が必要ですが、試験があります。一次試験は1000mを1分10秒で走れないといけないのですが、二次試験に学科試験があり、高校入試程度の国語、数学、社会の三科目があります。試験は年二回ありますが、試験前の3か月間、合宿形式の養成講座を実施していて、その学科の勉強を教えに行くという仕事です。競輪が開催されていない休み期間中の競輪場の宿舎を使用します。向日町、平城、岸和田、和歌山の競輪場を移動しながら3か月間試験対策です。和歌山の場合は、晩御飯を一緒に食べた後教えて宿泊し、翌朝は日の出とともにバンクの走り込み、朝食のあと午前中に教えて、昼ご飯を一緒に食べて京都に戻るといった感じでした。時給もよく、ご飯の量もものすごく多かったことを覚えています。

数学の方は、代数学、幾何学、解析学、複素解析学がコアコースとして講義＋演義

のセットで、保険数学はまだありませんでした。できる人は2回生から学部の講義も受けて3回生も4回生も講究に参加していました。当時はオーバードクターも問題になり始めていましたが、研究者になるために大学院に進学、そうでなければ就職という意識も強かったと思います。平成10年に大学院大学になったことから大学院の定員も大幅に増加し大半が大学院に進学しています。平成20年度から保険数学の教員で数学教室に行くことになった時は、オーバードクター問題は深刻化しており、研究者になるにはよっぽど優秀でないならやめた方が良いという風潮でした。現在はそれも多少はましになったようにも聴きますが日本社会では博士号をとっても世の中で活躍できる状況でないのは問題だと思います。データ解析や人工知能といったことで数学が世の中を下支えしていることを認識され始めていますし、大手金融機関のトップも理系出身になったことが話題になっていますが遅いと思います。

4回生

数学講究は複素函数論(M5)で、正村憲一、廣瀬賢一、原祐子、私の同級生の4人。楠幸男先生、谷口雅彦先生、大竹博巳先生、院生に須川敏幸さん、松崎克彦さんのフルメンバーでのご指導をいただきました。部屋は3号館の305号室で、ここ数年は数学同窓会の役員会を行っている部屋、発表当番の週によく立ち往生したことを思い出します。

西口さんの講演の中でマイナス金利の次は複素数金利を誰か考えてよ、というお話がありましたが、実は講究で読んだ本が、複素平面上の単位円盤で定義された確率を考える部分があったので保険会社に勤めてからも何か考えられないか思ったことはありました。しかし、とうとう30年間具体的に何も出来ずに野望のままで終わっております。

就職活動については同じ下宿の小林さんにご指導いただき大変お世話になりました。法学部をはじめとする文系学生がどういった就職活動の準備をしているのか、自己分析を徹底的にやること、新聞も購読すること、小林さんの同級生が就職した会社の評判などの情報収集、今日でも十分通用する基本中の基本を教えていただきました。その甲斐もあり無事就職できたと感謝しています。特に図書館で卒業生名簿をコピーして数学卒業生の名前と部署は覚えて面接に臨んだことが決定的なこともありました。「商品開発部に野呂さんという先輩がおられますがどんな仕事をされていますか？」と質問すると、「そこまで調べてきてるの？」と感心されたものです。

保険会社に内定したこともあり笠原皓司先生の数理統計学の講義を受講させていただきました。テキストは小針暁宏先生の「確率・統計入門」で、病に倒れられた遺稿をもとに作成された本で笠原先生はその作成者のお一人です。大学に通う電車の中で隣の人が読んでいたスポーツ新聞の阪神タイガースの選手の打率をメモって検定したらこうだったとか楽しんで教えていただいた思い出があります。

同じく4回生でしたが学生部で募集していたアルバイトに応募したところ、笠原先生と心理学の木下富雄先生、両先生からのご依頼の仕事でした。学生の情報化リテラシーやパーソナルコンピュータの使用状況に関する実態調査で、理学部と文学部の学

部生にアンケート送付する郵便のあて名書き、そのあと返信されてきた葉書の内容をパンチカードに打つという仕事でした。教務掛から借りてきた学生カードをもとに数学中央室であて名書きをしましたが、微分方程式の講義でお世話になった藤家龍雄先生に「汚い字やなあ」と笑われた記憶があります。字が綺麗だからアルバイトに選ばれたわけでもなかったのですが。

4回生にもなるとS6のメンバーであまり集まることもなくなっていたのですが、卒業が近くなると誰かの下宿に集まって徹夜で飲み明かしたりしました。私の下宿でもランプのナポレオンをしながら朝まで生テレビを見て、翌朝は東一条のクラークハウスにモーニングを食べに行き解散という感じでした。

楠先生がご定年で最終講義が3号館の大講義室（現在の127号室）で行われました。開始時間にはもう満席で教室の外から立ち見の状態でした。3月25日に学部卒業式の後、廣瀬君と一緒に楠先生の部屋にお世話になった挨拶を申し上げに行きました。楠先生からも「僕も卒業します」と挨拶されました。また「若い人は時間が無いとよく言うけどね時間は作るものだよ」と言われたことを覚えています。社会人になってこの言葉の重みを感じつつまさか19年後に戻ってくるとは思いもよりませんでした。ゼミの卒業生には私も同じく「時間は作るものだよ」と言っています。

京大保険数学の教員として

教育実習にも行き教員免許状もとっていますが、教員以外の就職先としてコンピューター関係、金融機関を当初から考えていました。私の父は鳥取大学の教授、母と祖父が高校教員、親戚に阪大のドイツ語の名誉教授と教職の家系でしたので、教職も自然と意識していたものの、ある思い出がネックとなっていました。それは、久しぶりの一家団欒での夕食のときに大学から電話がかかってきたことです。鳥取駅の交番で「僕はこれからどうなるんでしょうか」という心の悩みをもった学生を保護しているので、身元引受人として迎えに行ってください。ということで、父は夕食もそこそこに家を飛び出して行ったことがありました。学生担当の役職をしていた年度だったので、鮮烈な記憶として刻まれております。それもあってか、卒論担当の学生を家に呼んで忘年会をするのが毎年の恒例行事になっていました。教員は学生と真剣に向き合っていくというところで単に数学を教えるだけでは済まない大変な仕事と信じています。私自身は、教員家系純粋培養のまま教員になることは、その点で何か畏れ多いものを感じていました。世の中を広く見れる可能性に意識が向いていました。

とはいえ、母校の先生をすることになりました。これには河野明先生が深く関係しています。丸山先生がご尽力されて始まったアクチュアリー会との連携講座の世話役を河野先生が引き継いでおられました。派遣教員の増員にあたって、「御社は京大の卒業生を沢山採っているでしょう、京大数学の卒業生の方でお願いしたい」とのこと。大阪勤務の京大数学の卒業生の課長クラスが私だけでしたので私に決まったという経緯です。

私が大学に行った初日に河野先生から伺った話を紹介させてください。河野先生は大学卒業前に日本興業銀行に内定されてました。しかし、指導教官に大学に残るよう

に言われ、内定を断るために東京まで行かれたときに「日本の金融界を担う人材の育成をよろしく願います」と頼まれたこと。またケンブリッジに留学されていた時に数学の卒業生がアクチュアリー資格を取って保険が数学的にいかに合理的な仕組みかを説明して保険を勧めに来ること、日本の保険販売も義理人情プレゼント（業界用語でGNPといいます）ではなく、科学的なコンサルティングをする時代に変えるべきとの想いをお持ちでした。

自分の後輩が日本の金融界を背負って立つ人材として活躍することや、保険を数学的にも理解した卒業生が世のなかに増えていくことをイメージする素晴らしい仕事であることを深く認識しました。自分が学生の頃には京大は世界一自殺率の高い大学といわれていた記憶もありましたし、同級生でも留年する者も実際に何人もいましたので、相当大変な仕事であると思いましたが、この11年間学生のサポーター、また同窓会にも立ち上げから関わり「母校愛」を原動力に頑張ってきました。

それまでは、卒業してから大阪に住んでいたものの心の距離は遠く大学には近寄り難いものがありました。西口さんの講演会でも悪夢を見られたという話がありましたが、私がこの11年間で3回ほど見た悪夢があります。その夢には、いつも事務の篠崎さんが出てこられて「中山先生、大変です。先生の卒業の時の単位数の計算が間違っていて、実は卒業できてなかったんです!!」というものです。客員教授で教えに来ていて、ましてや同窓会役員までしているのに実は同窓会に入る資格がなかった！目が覚めて、ああ夢だったと思いつつも、実はひよっとしたら本当は卒業できてないんじゃないのか?という思いがどこかに残りました。

実は思い当たるふしが無いわけではありません。2回生の年度末の成績表を見るとフランス語が落第でした。しかしよく見ると評価の点数が載ってなくて－の表示となっている。教務掛にきくとフランス語中央室に確認してくださいとのこと。フランス語中央室に行くと確認すると東郷先生が資料を調べられて「あなた試験受けてないでしょ」「いいえ、試験受けましたよ」「答案用紙とは別に、氏名を書く回覧用紙に名前書きましたか?」「はい、紙が回ってきて名前書いて回しました」「あっそう、もうちょっと調べるので2週間ほど待ってくれる」というやり取りがありました。2週間後に合格とのことでした。

それから卒業願いを提出する際の話です。教養の専門基礎科目の一定数は学部の単位に振替可能でしたが、それが今一つ理解できてなかったのを恐る恐る教務掛の方に確認したら「大丈夫ですよ、数学講究（20単位）も出ているし卒業単位は余裕で超えています」とのこと。今思うと3回も夢に見るくらいなので、実は、という気がしなくもないのはこのやり取りかと思います。しかし、夢にまで見るのは毎週大学に行って「教務掛」の前を通ること意識されたのかもしれませんが、要するに大学に教えに来ていなければその夢は見ないのかもしれませんが、もともとは自分には先生は荷が重いというのが心の奥底にはあるからだと思います。

学生をいい意味で放任していた30年前の状況から、近年では、お節介を焼く、また管理を強化する状況に変わってきたとは思っています。私も、学生のメンタル面は特に意識をしまして、ゼミとゼミの間の時間を「もぐもぐタイム」と称して今出川通の

喫茶店コレクションでパウンドケーキとコーヒーのセットを学生と食べに行くことにしていました。就活でこういった話題ができれば意識高い系の数学の学生と見てもらえるのか、関西人なら笑いの一つでも取れるようになどの話をし、学生のサポーターを心掛けてきました。ある意味、世間から遠いところにある数学を勉強しているオタクと見られがちな学生もいます。「専門バカでないのはただのバカ」という小平邦彦さんの言葉も思い出されますが、とはいえ最近ではアクチュアリー就職の人気も相当なもので、勉強ができて社会性もあってかつ世間の情勢にも追いついてないと就職活動の壁は打ち破れません。

子育ての教訓として「乳児は肌を離すな。幼児は肌を離せ、手を離すな。少年は手を放せ、目を離すな。青年は目を離せ、心を離すな。」というのがあります。大学に来なくなりがちな学生には特に「心は離すな」を意識して接してきました。といっても所詮は週に1日大学に来ていただけですので本職の教員の方にしてみれば「何を当たり前のことを」という程度かと思っていますが、気持ちはかくありたいと努めてきました。

11年間も務めることができましたのも、学生さん、教員・事務の方々にも恵まれ大変お世話になったおかげであると感謝申し上げます。保険数学の演習は大した計算の問題ではありませんが、模範解答として想定していたものよりも遥かにスマートな解法で、さすが京大生や！という解答が幾度もあり、教える側としても沢山学ぶことができましたし、次回テキスト改定の際には是非紹介したい京大流解法もあります。また、修士論文の指導を通じて私自身も勉強させていただきました。同級生の廣瀬君（厚生省からILO（国際労働機関））には、平成23年度に「社会保障の数理」と題して保険数学連続講義をしていただきましたがこれも思い出深い出来事でした。

また、理学部ラジオという企画がありFM京都の放送に出させていただいたことも貴重な経験でした。そちらは、今でもネットで聴くことができますが、数学では、加藤文元先生、深谷賢治先生と私が出演、ほかには山極壽一総長（当時理学部長）、森和俊先生と錚々たるメンバーでした。最初に好きな曲や座右の銘の紹介があり、学生時代はどんな学生だったのか、現在の研究はどんなことをしているのか、といった内容で1時間の番組です。最後に、「先生にとって研究とは?」という質問がありました。私は、「理学は基礎研究が中心になるのですぐに役に立つものではないものの、いつか人の役に立つことを誰かがするという気持ちをどこかに持っていたい。」と申しあげました。「すぐ役に立つものは実際にはそんなに大して役には立たない。世の中を一変させるようなことはそんな簡単には解明できない」と思っています。

保険数学の教員の方々にも大変お世話になりました。他社から派遣の方には親しいお付き合いやご指導いただいた方もおられました。保険数学講座の運営を協力して出来たことは本当に得難い経験でした。

また重川先生、篠崎さんが中心となって企画いただいた夏のBBQや年度末の餅つきもできるだけ参加し楽しく過ごさせていただきました。そしてこの同窓会を通じて様々な分野の方ともお知り合いになることができました。最近では、河野敬雄先生と130年前の藤澤利喜太郎の「生命保険論」に関してRIMSの数学史の論文を共著で作成

させていただくご縁も頂きましたこと感謝申し上げます。

おわりに

最後に同窓会に関して監査役の観点から思った課題意識を申し添えます。当面は

- (1) 東京に会員の大半がいる現状に対して、東京でのイベント、東京支部立ち上げ
- (2) 寄付金残高も増えていくなか今後の中長期的な事業、京大125周年への参画のあり方

この2つは意識されてると思います。3つ目は実は同窓会の普遍的課題と思っておりますが「若い方の参加をどのようにして増やし続けるか（次世代の同窓会役員、スタッフ）」恐らく若い方々は、同年代でのFacebookやLINEグループで情報共有する「ヴァーチャルな同窓会」を常日頃からされている。その同世代の閉じた集まりで完結しているところから「世代を超えた集まりの同窓会」に積極的に参加いただけるように、同窓会の存在感を出していくことが必要です。SNSを活用した情報共有の推進、さらには、逆に有志によるオフ会の開催といったこともイメージされます。

以上、あれやこれやと取り留めのないことも申しましたが、改めて11年間お世話になったことに感謝いたしますとともに、引き続き京都大学数学教室のサポーターとして頑張っておりますのでよろしくお願いいたします。

(懇親会のスピーチの後で思い出されたことや、詳細も含めて書かせていただきました)